



Title	マゾヒズムとサディズムの暴力性 : バタイユにおけるその解決
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 89-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51233
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈論文〉

マゾヒズムとサディズムの暴力性
——バタイユにおけるその解決

宮澤 由歌

要旨

サディズムとマゾヒズムは、一対の単位として考えられてきた。それに対し、サディズムとマゾヒズムのそれぞれの独立性と著者たちの思想を検討する研究も見られる。本論文では、マゾヒズムについてレオ・ベルサーニやジル・ドゥルーズの思想を参照したあと、マゾヒズムから独立するサディズムの一考察としてジョルジュ・バタイユのサド論を検討する。彼のサディズム解釈では、他者との関係の断絶と、主体と対象破壊の欲望の存在が明示されている。従来考えられてきたサディズムをより深く考察し、人間の生と暴力とエロティシズムを結びつけた点において、バタイユのサディズム解釈は特殊なものであるといえる。

キーワード

ジョルジュ・バタイユ、サディズム、マゾヒズム、暴力、エロティシズム

はじめに

本論文では、サディズムとマゾヒズムに共通性があることを論じる。自己破壊の欲望を叶えようとするという点で、それらは共通しているのである。この観点から、従来考えられてきたサド＝マゾヒズムを対とする単位を強化するものではない。サド＝マゾヒズムという単位がサディズムとマゾヒズムの一対性を主張するのに対し、わたしたちが論じるサディズムとマゾヒズムの共通性は、それぞれ独立している。違った仕方あるいは物語のなかで、自己破壊性の特徴をもつ点で共通である。

サド＝マゾヒズムの単位に対する批判は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズが『マゾッホとサド』で明らかにしているものである。この著書は、主にマゾヒズムの内実について思想的に検討するが、同時にサド＝マゾヒズムの単位に対する批判、すなわちサディズムとマゾヒズムの本質的な差異に基づく独立性を主張する。サディズムとマゾヒズムにはそれぞれ構造的に異なる物語が存在するというのがドゥルーズの主張であるが、それは本論文でサディズムとマゾヒズムのなかに自己破壊という共通性を見出すことと矛盾しはしない。構造的に異なる物語のなかで、それぞれに自己破壊にかんじた特徴を見出すことができるのである。

マゾヒズムの自己破壊性については、アメリカのフランス文学研究者であるレオ・ベルサーニが論じている。一般的に、マゾヒストは暴力を被ることを肯定する者だと考えられているから、この自己破壊性については容易に把握しやすいものだろう。ただし、ドゥルーズが示すように、マゾヒズムにはサディズム

とは独立した物語があるのだとすれば、サディストから被るものではなく、マゾヒズムに固有の自己破壊の欲望を見出せると考えられる。また、ベルサーニがフロイトの分析を通してマゾヒズムに生物学的な根拠を与え、サディズムの派生物として捉えられないとする議論はマゾヒズムの物語の独自性に説得力を与えるものである。

一方で、サディズムの自己破壊性についてはどうだろうか。ドゥルーズもベルサーニも、サディズムが自己破壊的な欲望を持っていることを積極的に否定しない。多く論じられることのないこの論点について、フランスの思想家ジョルジュ・バタイユのサド論は考察に値する文章である。彼のサド論には、通常考えられる他者への暴力を行使することで快楽を得るサディストとは別に、ドゥルーズとベルサーニが肯定するマゾヒズムの自己破壊性に近い欲望が見出される。すなわち、サディスト自身の自己破壊の欲望である。さらに、バタイユは、サドの思想における自己破壊の欲望の考察を通じて、暴力が人間の生にとって不可欠なものであることを認め、暴力の意義を提示する。暴力は、悪である。だが、わたしたちは個体としての生に暴力が内在することを否定するのではなく、それとどう付き合っていくかと問う必要があるのではないか。この問いに対し、バタイユのサド論は新たな局面を切りひらく。

1. マゾヒズムの自己破壊性と暴力の保障——ベルサーニの考察について

はじめにマゾヒズムの自己破壊のメカニズムについて、ベルサーニの考察を参照したい。ベルサーニは、フロイトの理論を踏襲しながらマゾヒズムがセクシュアリティの基盤にあるという論を展開している。この点については、川崎惣一¹⁾が論じている。わたしたちが注目するのは、そのなかでも、ベルサーニがマゾヒズムのメカニズムを生物学的なものに見ている点と、マゾヒズムによって人間はある程度の暴力に耐えることができるという論点である。

ベルサーニによれば、マゾヒズムは人間に内在する心的システムである。これが根拠づけられるのは、発達心理学的な観点による幼児期における親との交流の場についての考察である。

もっとも意味あることとして、わたしはマゾヒズムが生に役立つと主張したい。おそらく単にこういうことだ、セクシュアリティが存在論的にマゾヒズムを基盤にしており、マゾヒズムは人間の有機体が強烈な刺激の時期と、わたしが今しがた言及した抵抗あるいは防衛する自我の構造の発達とのあいだの隔たりを生きのびさせるのである。マゾヒズムは心的戦略であろう。その戦略は、生物学的には機能不全の成熟過程に一部打ち勝つのだ。セクシュアリティのモデルとしてのマゾヒズムは、わたしたちの乳児期や幼児期を生き抜くことを可能にするのだ。(Bersani, p.39)

幼児は自我が未成熟なまま他者から刺激を受け取らなければならない運命にある。マゾヒズムは、幼児が個体としての生を保つための限界を超えたと判断される刺激に直面したとき作動する。すなわち、マゾヒズムは自己規制のメカニズムを持ち、それは主体が感じる情動を苦痛から快楽へと変換するのである。別様にいえば、マゾヒズムは主体への攻撃を脱権力化する能力を持っているのである。ここまでのベルサ

一ニの考察から導き出せるのは、人間は必然的に受容せざるを得ない刺激にかんして、個体を生き延びさせる目的でマゾヒズムを要請するということである。また、マゾヒズムを有する人間は、自己をある程度の暴力に耐えさせる能力を有しているということである。

ベルサーニは、マゾヒズムの能力を凌駕する量の刺激＝暴力について語ってもいる。マゾヒズムのシステムが大量の刺激によって電池切れになると、刺激は主体そのものを壊すことになる。ここから、ベルサーニは、過剰な刺激は、一般的に、精神分析の思想において悪と関連づけられてきたと指摘する。マゾヒズムは能力であると同時に、主体を破壊する可能性のある暴力を受け入れる構造になっているということである。マゾヒズムの自己破壊性を以上の論考に見ることができるだろう。

マゾヒズムは単なる被虐の快楽を追求する嗜好をあらわすのではない。以上の議論によって、マゾヒズムが自己を破壊するプロセスが明らかになった。わたしたちにとって重要なのはマゾヒズムが主体性と自己性の形成の発達に伴う必然的な機構であるとする議論である。さらに、成長を終えた主体はつねに他者への攻撃の能力を有する。ベルサーニは、マゾヒズム機構を持つ主体を崩壊させないように調整する役割として自我ではなくITを持ち出す。自我を調整する役割に超自我を充てる精神分析に対し、ベルサーニはエスを英語で言い表すITを利用する。ドゥルーズの示唆を先回りして述べるならば、超自我が父を象徴するとすれば、ITは母の象徴であり、ベルサーニにおいては父に変わって母の力が強く作用する。こうしたITをうまく利用することがベルサーニにとっての倫理的な要請である。つまり、ITをうまく調整することができれば、マゾヒズムにおける究極的な自己破壊＝死は避けられることになる。ベルサーニによれば、マゾヒズムによって、わたしたちは与えられるある程度の暴力に耐えうるのである。また、ここでは深く論じないが、ITを他者とのかわりに関与させる可能性についてもベルサーニは論じている。

2. マゾヒズムとサディズムの独立性

2.1

他方サディズムにおける自己破壊性について論じる前に、ドゥルーズの『マゾッホとサド』におけるマゾヒズムとサディズムの独立性を確認しよう。本論は、マゾヒズムとサディズムが一对の単位であることを前提とする物語とは決別した態度をとる。マゾヒズムにはマゾヒズムの、サディズムにはサディズムの固有の物語があり、それぞれの物語のなかで自己破壊性を見いだせることを前提にしている。この態度は、ドゥルーズの議論に依拠したものである。

ドゥルーズは、『マゾッホとサド』においてマゾヒズムの復権を目指しているように思える。具体的にいえば、それは二点に絞られる。サディズムの権力に従属するマゾヒズムと、サド＝マゾヒズムの単位に焦点を絞られたマゾヒズムからの復権である。ドゥルーズは、マゾヒズムについての物語を法と制度、母権的、反復といったタームを用いながら語ったのち、次のように述べている。

サディズムもまたひとつの物語である。それは、マゾヒズムの物語とは完全に異なった文脈と闘争のなかで、いかにして自我がうち負かされ追放されるか、いかにして拘束されない超自我が排除の役割

を演じるのかを語る。それは父親の役割の膨張した観念を手本にしたものだ。母親と自我は、選りぬぎの犠牲者になる。いまや超自我によって表象される去勢は、道徳的であるあるいは道徳を説くキャラクターとしてあることを停止し、それ以来もはや内なる自我に向かうことはなく、むしろ外部へ転身する。拒絶された自我の資格を持った外部の犠牲者へとむかうのだ。死の本能は、恐ろしい自然の思考というキャラクター、論証的理性のひとつの観念として考えられる。そして再セクシュアル化はサドの「考える者」の「自我理想」を圧迫する。彼はしたがってあらゆる点でマゾヒズムの幻想と対立する存在に立ちかえるのである。事実、彼はまるで異なるひとつの物語なのである。(Deleuze, pp.131-132)

引用にある、去勢の再強化、道徳的であるあるいは道徳を説くキャラクター、死の本能についてといったテーマは、この引用部までにドゥルーズによって主にマゾヒズムについて論じられる。それぞれのテーマに相当する章において、断片的にサディズムについて論じられている箇所をわたしたちは見つけることができる。だが、ドゥルーズが引用部において疑問形を用いていることを根拠に、サディズムの物語が主観的に記されることはない。

2.2 ドゥルーズのマゾヒズムとサディズムの議論

ドゥルーズのマゾヒズムの議論は、マゾッホの小説を入念に読み込むことによって、マゾヒズムの精神分析による屈折した物語から解放する。田中美代子は、論文「世界像の変換」²⁾において、『マゾッホとサド』におけるサディズムの父権制、マゾヒズムの母権制の結びつきを指摘し、母権制の父権制に対する凌駕の可能性を指摘する。だがこれは、家父長制の転倒という意味ではない。母を組みしだく父に変わって、父に鞭をふるう母を意味しているのではない。小泉義之は、『ドゥルーズと狂気』のなかで、マゾヒストが(サディストに比べて)偉大であることを認めながら、母について次のように述べている。

その母性的なものは、通例のファミリー・ロマンスで思い描かれることのほとんどないものであるということです。ドゥルーズは、通例の母性的なものとは区別される特異な母性的なものを思い描こうとしているのです。(小泉、p.45)

女性の手を借りてエディプス・コンプレックスに鞭を振るってもらいながら一切を否認すること、それこそがマゾヒズムなのです。(同上、p.47)

小泉によれば、ドゥルーズにおけるマゾヒズムは単に家父長制における父の権力に抵抗する母と契約を結ぼうとするのではない。マゾヒストは、母と契約を結ぶとされているが、この母は父の地位を奪還する者ではない。そうではなく、マゾヒズムが偉大なのは、サディストの物語においてはたどり着くことのできないカオス的な「第一の自然」に到達するために母を二重に解釈することを前提としている。マゾヒス

トが契約を結ぼうとする母は、子を父になりかわるよう養育をすると同時に、エディプス・コンプレックスに鞭を振るいその権力性を否定する一見すると矛盾する二重性を持っている。「第一の自然」については、以下で再度触れることにしよう。

その一方でドゥルーズは、クロソウスキーの自然の概念を援用しながら、サドで問われるのは「領域」と「深度」にかかわる否定であると語る。それによれば、「領域」は、つねに自我と似たような存在である他者を必要とし、弁証法的小おこなわれる部分的過程としての否定である。一方「深度」の観点からすれば、否定は純粹否定の代弁者であり、純粹否定はどこまで降下しても達することのない底のようなものを想定される。サドは前者の否定の「領域」の次元を描いており、そこではそれ自身の規律と法則に従属した自然が弁証法的な関係として想定され、法の絶対的破壊すなわち第一の自然の開示は不可能となる。ドゥルーズは、サドの主人公が論証性を反復することで濃度を増した「領域」は、「深度」へと近づくとするが、それらが極限まで近づくこと、あるいは「領域」が「深度」へと近づこうとすることがあるとしても、重なり合うことはないとする。マゾヒズムの偉大さを際立たせるのは、サディストのこうした重大な欠陥である。すなわち、サディストは、自分が語る推論的で理性的な哲学によって、法の指定する自然を打ち負かそうと試みる（領域）が、それは法を外れるカオス的な第一の自然（深度）に到達することには至らない。

ここで、ドゥルーズの次の指摘を見ておこう。反復によって第一の自然へと到達しようとしつつそれに失敗する弁証法的な運動をおこなうサドの自我についての部分である。

放蕩者は、他人に課する苦痛をみずからも好んでこうむる。外部へと向けられた破壊の錯乱は、外部の犠牲者との同一視を伴っているのだ。サディスト的イロニーとは、次のようなものをいうのである。つまり、サディストはみずからの分解した自我を必然的に外部へと投射し、同時に外部なるものを唯一の自我として生きる手段たる、二重の操作をいうのである。

マゾヒストが、自身が幻想する二重の母との契約のうちで世界を構築しようとする複雑さのなかで生きることが鑑みれば、引用にあるようなサディストの行動はひとり相撲であると言わざるを得ない。サディストは、自身を外部に投影し、その外部を破壊する欲望のおかげで結局のところ自己破壊に陥ってしまうのではないか。ドゥルーズの引用からは、以上のようなことが推測される。サディストは孤独である。マゾヒストはそれに比べ、母との契約関係のなかで法が見逃す第一の自然に接触を試みる。ベルサーニとドゥルーズの議論を追えば、わたしたちはサディズムに対するマゾヒズムの優位性を認めざるを得ない。しかし、本当に、サディズムはマゾヒズムに比べて、あるいは根本的に、新たな何かを切り開くことのない概念として終わってしまうのだろうか。サディズムと父権制が批判される潮流のなかで、サディズムを従来とは別の仕方得意義づけることは不可能なのだろうか。そうではない。パタイユのサド論において、サディズムは、ベルサーニとドゥルーズのマゾヒズムに近い形で自己破壊の様相を呈し、さらには暴力にかんしてその意義を提示するのである。

3. バタイユのサド論における自己破壊性と暴力

3.1 サドの言語

ドゥルーズは、サディズムを論じるなかで、バタイユについて言及している。

ジョルジュ・バタイユは、ナチズムとサド文学との関連を説くあらゆる言辞を無効にしえたはずのテキストの一つで、サドの言語は本質的に犠牲者の言語であるが故に、逆説的なものだと言っている。拷問を叙述しうるのは犠牲者たちだけなのだ。拷問者は必然的に確立した秩序と権力の偽善的言語をくりひろげる。(Deleuze, p.17)

ドゥルーズがバタイユに言及する文脈は、サドとマゾッホの用いる言語にかんするものである。ドゥルーズはじめにサドの言語について語り、その次に一般的にその相補物と考えられている（が、ドゥルーズによつてのちにその関係を否定されることになる）マゾッホの主人公である犠牲者の言語に注目する。この文脈において提示されるバタイユの見解には、サディズムの重要な特徴が描かれている。それは、暴力についての論点である。

バタイユは、『エロティシズム』で拷問者について言及した箇所、拷問者は暴力の言語を用いるのではなく、自己を容認しかつ正当化してくれ、自身が優位に立ちうるような権力の言語を使うのだと主張した。これは、バタイユによればサディストではない。バタイユは、したがってサドが語るのは、これとは異なり、逆説的に犠牲者の言葉だと言う。サドの言語は、二つの叙景場面に挟まれた放蕩者の読み上げる論文における推論的理性をその特徴とする。つまり、バタイユによれば、サディストとは単純に権力を保有しつづけようとする拷問者ではなく、普遍的な分析的「理性」に力を借りる者のことである。本来暴力とは無口なものである、サドの放蕩者の言語は権力を保持しようとする偽善的なものではない。

一般的に考えられている、他者へと暴力をふるうことによって快楽を得るとするサディズムについて、バタイユは次のように述べている。

じっさい、今日では、悪事を働きたい、人を殺したいという欲求と性欲とを結合する衝動が存在していると、誰も認めているだろう。たとえばサディスティックと呼ばれる本能は、ある種の残虐行為を説明する手段を説明する手段を正常な人間に与えている。(…) たしかに、不安げで理性的な人間の視点であることに変わりはない。だがこの視点のはもはやサドという名が意味しているものをきっぱりと遠ざけたりしなくなっている。『ジュステイーヌ』と『ジュリエット』が描き出す本能は今や市民権を得ている。現代のジャンナンたちはこの本能を承認している。彼らはこの本能を前にして顔を覆うことはやめ、この本能を理解する可能性を憤りのなかへ捨て去ることをしなくなっている。とはいえ彼らは、この本能を病的な存在として認めているにすぎないのだが。(X, p.181-182)

バタイユにとっての、一般的なサディズムに対する理解が、この引用部に表されている。それは、性に

かんする暴力について正常な人間が感じる不安として表出するものであり、本能として承認されているものである。そして、重要なことに、それは病的なものと考えられているとバタイユは捉えている。だが、こうした正常な人間のサディズム観は、バタイユにとっては物足りないものであつただろう。サドの思想及び文章の持つ価値は、複雑で、生に対して深く関わるものであるとされている。より重要なことに、バタイユはサディズムを病的であると断定するのではなく、むしろ人間が普遍的に有している暴力への新たな論考を明るみに出すものとして考えているのである。

他者に対する暴力を正当化しようとし、暴力に言葉を与える拷問者でないとするならば、サディストの暴力性はどこへ向かうだろうか。わたしたちは、それをサディスト本人に向かうものだと考え、自己破壊性と結びつけることができるだろう。まずは、バタイユが論じるサディストの行動に、ドゥルーズが指摘したサディストの物語を見透かすことができる点を確認しよう。

3.2 サドの異質学的検討

「サドの使用価値」のなかで、バタイユはサディズムを（１）排泄する力の突然の侵入（２）この力に対抗しようとするすべてを限界づけ支配下におこうとする意志と定義づける⁴⁾。

排泄する力は、突然に侵入してくる。バタイユはサドの『新ジュスティーヌ・あるいは美德の不幸』から以下のように引用し、そのありようを明らかにしている。

ヴェルヌイユは、ひとに排便させた。彼はその糞便を食べ、そして彼のものをひとが食べてくれるように望むのだった。彼が自分の糞を食べさせた女は、嘔吐したが、彼は女が吐き出したものを飲み込んだ。（Ⅱ , p.59）

排泄物は、女にとっては吐き出す対象である。一方で、サドの放蕩者は自らそれを取り込もうとする。排泄行為は、バタイユによれば「異質性から来る結果と現れ、異質性をさらに拡大していく方向に展開され、そのために両義的な性格をいっそう明らかにする諸々の衝動を解き放つ」という。そもそも糞便は、自分の内部で異質すなわち自分の外部にあるものと認識された結果、排泄される。さらにサドにおいては食糞によって、糞便はさらに自我の外部にあるものを獲得する循環のプロセスとして描かれている。このプロセスを、バタイユは「大なり小なり暴力的な排出（あるいは射出）状態の中に身も心もすべてを投げ出したいという欲望」の現れとみなしている。サドは、自身の内部において過去に自身にとって異質であると認識されたものを再度取り込む自己循環を示している。

わたしたちは上記のバタイユの主張から、第一に自我に対する外部性をもつものが異質なものとして認識されることを確認できる。サドにおいてはこの異質なものは自我の外部であつたと同時にその後自我に取り込まれる運命を辿る。これは、自我とその外のものとの交感を可能にする認識の運動である。これは弁証法的な運動といえるだろう。また、自己破壊のプロセスについても明確にすることができる。それは、獲得と排泄のプロセスにおいてある程度の暴力性に身と心を投げ出すことを伴う。これは、一般的にみれ

ば自己に対して暴力的なものだと言うことができるだろう。この欲望は、サドにおける指向であるということができる。したがって、この欲望をバタイユの考えるサディズムの主な特徴として捉えることができる。

サドは暴力を通じ自我の外部性としてあるものを取りこむ循環を肯定していた。このことについては、佐々木雄大が「エコノミー・スカトロジック」と名指している。この名付けはサドの用いた表現がスカトロジーであることから来ている。だが、重要なことに、それはスカトロジーの嗜好を強調するのではなく、奇抜で新しい自己循環のかたちに与えられたことばである。佐々木は、バタイユのサドの思想の解釈とバタイユの思想を経済論的な立場から検討し、バタイユの一般経済論と結びつけているのである。わたしたちはこれに加え、もうひとつの見解を提示できる。それは、サドの暴力の犠牲者は、マゾッホが描いた被害者とは異なるということである。バタイユのサディズム解釈における犠牲者は、外部のものを自我に取り込む暴力性を必然的に抱えこむサド自身にほかならない。

3.3 サディズムと暴力の露呈

バタイユが理解するサディズムは、他者への拷問により性の快楽を得るよりもむしろ、自己への暴力性と快楽を結びつける。そもそもバタイユは、エロティシズムが暴力と不可分なものであることを認めていた。

じっさい、エロティシズムの深みにおいて性の結合は危険にさらされる。性の結合は生と死の中途半端な状態なのだ。暴力こそエロティシズムの神髄なのであり、ただ暴力の実現だけが人間の至高のイメージを満たすものなのである。(X, p.167)

バタイユはこうして、性と暴力を結びつけるサドの思想を肯定する。この暴力性は、上記で確認したとおり、自身を含むすべてを破壊する強烈なものである。ホップズが主張し、精神分析が観察を通して提示したように、こうした自己への攻撃性を人間が本性としてもつことを否定できないとすれば、わたしたちは暴力を肯定することはできないとしても、その存在を抑圧したり、認めないこととしたりすることはできない。ただし、人間が社会的に生きる上でこの暴力性は共同体の存続を危機に晒すものである。バタイユは、人間の不安の情動を兆候とすることで、次のように述べている。

各人は他の人々と絆を結んだり結ばれたりして生きているのであって、その絆から切り離されてしまうと、どの人間の存在も考えられなくなる。一個の人間の自律は、相互依存に与えられた制約よりましなものではあるが、しかし相互依存がなければ、いかなる人間の生もありえないのである。

(X, p.168)

バタイユは、「実生活においてサドは自分以外の人間のことを考慮にいれていた」と述べる。サドは、少なくとも実生活においては、独我論的でもなければ、他人を道具として扱う姿勢をとるわけでもない。バタイユもサドも、暴力が人間の生を脅かすこと、それゆえ他者を尊重するために暴力が悪性のものと規

定されることを認識していた。抗うことのできないほど人間に内在する暴力性と、その暴力を抑えなければ存続できない人間の生とはぶつかりあい、結局のところ暴力の抑圧が勝利するだろう。だからこそ、サドは文学のなかで、暴力についての試論を突き詰めたのだとバタイユは言う。

サドにとってバステュー監獄は砂漠であり、文学だけが情念の唯一のはけ口になっていた。こうした状況が廻りたて、可能性の限界がそれのなかで濃縮された文学のおかげで私たちは、面前の他者など物の数に入らなくなった人間の正確なイメージがもてるようになったのだ。(X, p.167)

したがって、抑圧されない暴力の行く末についての思考を可能にするのは、孤独である。他者への暴力よりもむしろ、自分自身へと向かう暴力は、孤独のなかにある。あるいは、人間の生が相互依存の状態を保持する以上にエネルギーを持っているという「過剰」の定義のなかでのことである。過剰は理性的活動の外側にあり、理性が及ばないところでの思考（この思考をバタイユは精神の運動と呼ぶ）を可能にする。そこで暴力は、バタイユの至高の概念によって解決を得る。

3.4 暴力を解決する至高性

至高性については、それを詳細に論じた『至高性』という著書もあるとおり、バタイユにとって重要な概念であり、わたしたちがここで論じるには紙幅の関係からも困難である。バタイユの至高性についての検討は、主に、至高性を体現する至高者と、至高者に対して深い主観性のうちで呼応する者との関係において語られる。歴史的な観点から、至高者にはたとえば古代の王が挙げられており、彼は経済的な循環から外れて、エネルギーや富を消尽する存在である。バタイユは、古代の宗教的で神的なシステムがなくなった現在において、サドを至高へと到達する意志をもった者と主張し、次のように述べている。

サドは君主制的な秩序の廃絶を罪であると性格づけた。したがって革命的活動に奔走する大衆は罪のうちにいるのであり、革命派のひとりひとは他者と共犯関係によって結ばれているのだ。そして各人はたしかに罪に加担しているのだから、根気強くそれに固執すべきなのである。(VIII, p.297)

古代の人間にとって、王は権力を持ち、エネルギーや富を消費する者であるが、民衆はそれに搾取され服従するだけの存在ではない。むしろ、王は民衆の深い主観性を体現する代表者である。したがって、革命による王の殺害は、理性的に生きる民衆における深い主観性の発露を断つ行為として、罪深いものである。しかし、サドはこの罪に固執し、罪を負った行為を極限まで推し進めた。すなわち、暴力を伴った革命である。

そしてわたしが見るところによれば、〔サドの残虐行為の並外れた行き過ぎにおいて〕力点がおかれているのは、ひとえに、反抗というものがそこにつまずき、乗上げる暗礁を、はっきりと刻印する

ことだと思える。(Ⅷ, p.298)

民衆の革命とサドの残虐行為の背景にある思想は、反抗の行き着く先をはっきりと刻印する。終末を見たかのように見える革命は、それでもひとつの意義を残している。それは、主体の破壊という結果である。バタイユは、逆説的にそれを悲劇的なものとして次のように述べている。

君主制社会にとっては、彼〔王〕はひとつの客体（物）にしかすぎなかったのだが、共和制社会においても次の点を除いてはなにも変わらなかったのだ。すなわち彼の眼前に、もはやあの主体は見えなくなったという点、その至高な性格こそ、彼を制限付ける唯一の原因であると思われたあの主体はいなくなったという点を別にすれば。(Ⅷ, p.298)

至高者という主体は殺害され、民衆は自らの深い主観性を体現する主体を失う。一見するとバタイユに批判されているように見えるこの暴力的革命は、だが、王と民衆とのあいだにあった共犯関係を壊し、深い主観性を各々の心のなかに閉じ込める。これこそが、サドが置かれた状況であるところの孤独である。わたしたちが上記で見たスカトロジックな自己循環と、歴史的なこの考察は、バタイユのなかでは確実に関連している。それは、(この歴史的な文脈における王と民衆のような)相互依存によってしか生きることのできないはずの人間の、革命によって滅ぼされた後の各々の孤独性から、サドの孤独な自己循環への接続である。

王の殺害による民衆の孤独化に象徴される、人間存在の孤立について参照しよう。バタイユは、相互依存対象がなくなったとき、人間が孤独のなかでどのように自由あるいは不自由であるかを論じている。そこでは、サドが描いた自己破壊性を生みだす自己循環に至る過程が描かれている。

他の人々に較べれば、歴史上の至高者は必要性のさまざまな要請を免れてはいた。忠実な臣下たちが与えてくれた権力のおかげで、最大限これを免れていた。君主と臣下たちとのあいだの忠誠関係は、臣下たちの従属と、君主の至高性に彼らがあずかるという原則とに基づいていた。だがサドが提示する至高の人間は、現実の至高性を持ちあわせていない。虚構の人物でしかないのだ。その権力はいかなる義務によっても制限されていない。もはや権力を与えてくれる臣下たちに対してこの至高の人間が守らねばならないような忠誠関係はないのである。だが、サドの至高者は、他者たちに対して自由ではあっても、自分自身の至高性の犠牲者ではある。(Ⅹ, p.173)

こうして、サドの至高者は、自分自身の主体に暴力をふるう。主体はバタイユにとって現存の次元におかれるものであり、他方で存在がある。主体を壊すことで、サディズムは、存在への道を開かれる。この存在は、発話者としての主体の崩壊のあとに残るものである。これは、主体が従属する王にかんする法を失ったあと、自己破壊の過程を通して達する存在である。存在の生については別の論文に紙幅をさくとし

でも、その内実が主体とはまったく異なったものに触れることに注目したい。

3.5 一般的な倫理とサドの倫理

理性的で再生産を理念として行動する人間に抑圧される暴力性は、古代においては王という至高者への深い主観性における共鳴によって解消されていた。だが、歴史に刻まれた革命の後に、人々は不可避免的にその解消の方法を絶たれる。こうして、暴力性に対して孤独に立ち向かうよりほかなくなった人々の暴力性は、行き場をなくしてしまう。いわば事故としてのその暴力のひとつの発露を、バタイユは世界大戦に示唆し、第三次世界大戦の勃発を念頭に置いている。理性的で再生産をおこなう人間の現存の一方に、存在としての生がある。ここでの生は、個体としての生ではなく、むしろ世界に存在するエネルギーの運動としての連続的な生のことである。バタイユは、サディズムがその生に到達する試みであったことを見出す。サディズムの運動は、一般的な倫理には反するかもしれないが、一方で生の連続性への道を開く解決策でもあるのだ。連続的な生、それは、自然的な生であり、さらにいえばドゥルーズが指摘した第一の自然に似通ったものであるに違いない。バタイユはまず、理性的な人間において暴力が抑圧される様子を次のように述べ、それが権力者の言葉として顕在することを示している。

暴力は、文明人によって無益で、しかも危険だとみなされて、理性的に否定されたのだが、しかしこの理性的な否定は自分が否定した当のもの、つまり暴力を排除できているわけではない。(X, p.186)

暴力は排除されえないことは、前提としてある。理性的な人間の社会において、それは権力者のみが発露できるもので、犠牲者に対して行使されるという道筋をとる。ドゥルーズが肯定した、バタイユのサドの言語にかんする記述をもう一度引用しよう。そこでは、暴力が正当化された仕方でも発露し、それが肯定される言語について述べられている。

ジョルジュ・バタイユは、ナチズムとサド文学との関連を説くあらゆる言辞を無効にしえたはずのテキストの一つで、サドの言語は本質的に犠牲者の言語であるが故に、逆説的なものだとして述べている。拷問を叙述しうるのは犠牲者たちだけなのだ。拷問者は必然的に確立した秩序と権力の偽善の言語をくりひろげる。(Deleuze, p.17)

権力者による犠牲者への暴力は、言葉でもって自己正当化され、その存在を許される。バタイユはこれを欺瞞的なものだとしてみなしている。バタイユは、サドが、その思想とは逆説的に、こうした言葉をサドの物語の登場人物たちに語らせることを認める。だが、バタイユによれば、それはサドが他者に向かって暴力についての何事かを伝えようとする目的に沿ったものであり、その点が、単なる拷問者とサドの違いである。

暴力は、人間の生の二つの様相と関係して語られ、そのうちひとつの様相のにおいて正当化されずに存

在する。そこで、暴力は無口である。正当化のための雄弁さと、真性の暴力の無口さは、文明人と野蛮人という区別において語られている。一方で理性に従順で規則に従う生があり、他方で略奪をし、人を殺す生がある。この二極は、前者が文明人、後者が野蛮人として象徴され、言葉を語るのはつねに文明人である、とバタイユは言う。したがって、暴力的な野蛮人は語ることがない。とはいえ、文明人にも野蛮人にも、暴力は等しく内在していることに変わりはない。

権力者が言葉を語るのは、彼らにも隠された野蛮な生、暴力を正当化するためである。それは彼らが准じる規則に対する自己正当化のための弁明である。一方サドは、孤独を極めることによって、誰に対しても権力を行使したり、服従したりする必要性のない場所で思想を展開した。そこでなお、サドは暴力に言葉を与えようとした。他者に対し、人間存在に内在する純粋な暴力性を伝えようとして、サドは暴力を語るのである。

そうして語られた暴力は、人間の野蛮な生に限りなく近づくとはいえるだろう。そこで語られることばは、発話者としての「わたし」を崩壊させ、理性的な生とは別様の生を明らかにするのである。だが、発話者である限り、わたしたちは主体として存在し、冷静さを手放すことはない。サドの試みは、誰に対してでもない、ただ純粋な暴力性というものを証明しようとするものにほかならない。その試みは、主体として生きながらも、そこから悪性のものとして排除される暴力性を意識上にのぼらせようとする試みである。こうして、権力を伴う他者関係に束縛されない暴力を明らかにしようとサドは試みている。これこそがバタイユがサドにおいて明らかにしたところのサディズムとその価値であると考えられる。

結論

マゾヒズムがサディズムから独立し、サド＝マゾヒズムの単位性から解放されることから、サディズムもそれ固有の物語を所有することが推測される。わたしたちは、ドゥルーズの議論を前提として、マゾヒズムについてはバルサーニの、サディズムについてはバタイユの自己破壊という共通性について確認してきた。さらにバタイユは、サドの物語からサディズムの本質的な意義を見出した。それは、人間に内在する暴力を悪性のものと決めつけ、それでもなくなることのない暴力を正当化する者とは別の仕方、その真的な存在性を暴露することにある。サドの思想にみられる暴力は、他者との関係性を破壊し、自分自身の主体性を破壊し、理性的で再生産を理念とする人間の生の傾向と対立するもうひとつの生を明らかにする。対立するふたつの生を統一するためのサドの試みは、その一方を野蛮だと考える人々を憤慨させ気味の悪いものと感じさせるだろう。だが、これこそがバタイユが自我の外部にあるものとそれを飲み込む人間の在り方として提示し、主張したのものである。こうして、バタイユのサディズムは他者との関係の断絶、孤独のなかでの自分自身の主体の破壊、連続した生への道筋を明らかにするものとして、提示されているのである。

註

- 1) 「レオ・ベルサーニのセクシュアリティ論：マゾヒズムとしてのセクシュアリティ」、川崎惣一、2006、環太平洋女性学研究会会報 Rim 8(1/2)、pp.42-54。
- 2) 「世界像の変換：ジル・ドゥルーズ著「マゾッホとサド」を読んで」、田中美代子、1973、早稲田文学〔第7次〕5(10)、pp.86-89。
- 3) II , p.56.
- 4) 「聖なるもののエコノミー」、佐々木雄大、2014、ユリイカ第46巻第12号、pp.120-127、青土社。

引用・参考文献

※なお、ここに記した文献からの引用は、著者名および全集の巻号とそのページ数を付する。

Bataille. Georges, *Œuvres complètes*. Gallimard, XII volumes, 1970-1988.

Bersani. Leo and Phillips. Adam, *Intimacies*. The University of Chicago Press, 2008.

Bersani. Leo, *TheFreudianBody: Psychoanalysis and Art*. Columbia University Press. 1986.

Deleuze. Deleuze, Coldness and Cruelty. MIT Press, 1989.

小泉義之、『ドゥルーズと狂気』、2014、河出書房新社。

The Violences of Masochism and Sadism: The Extrication by Bataille

Yuka MIYAZAWA

Abstract:

We have thought about sadism and masochism as a single unit. At the same time, we can find studies that argue they are independent concepts. In this article, we study Georges Bataille's reading of sadism. We have to refer to the thought of masochism by Leo Bersani and Gilles Deleuze. Bataille's reading explains the severance of the unit of sadism-masochism and the desire of subject and object. Bataille's explanations are special insofar as they relate to violence and eroticism in human beings.

Key Words : Georges Bataille, sadism, masochism, violence, eroticism